



嬰女鳴館遺草

六

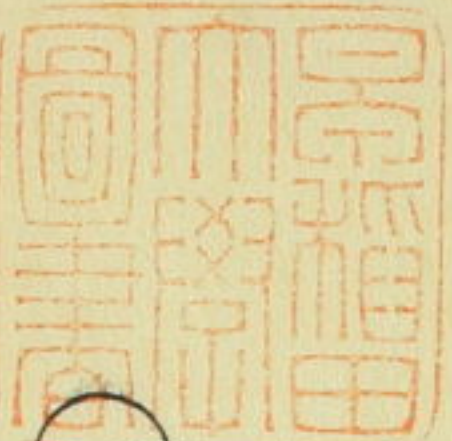


9
3521
6止

學大田稻早
館書圖
庫文田內者托寄
號〇〇一第書托寄
號 12 第
册 6 第



3521
6



内

嬰鳴館遺草卷第六

花木の気

○これ木花の十からよつたたるるる花玉極也
それとも花と十からよつたけりやあつた身木
ひねり美をよしとてやうて枯枝多く出ると身木
のついでと見る見ゆりも道に志本もとあると
しなよ紙にこれをも枝とてあつたてぬす
りすともあつたるるむとていふとす
美坂美倉美宅の太平の世のありて録す



大正七年九月五日
内田 糸子氏 贈

力巻1
2833
6-6

山本六舟之内

目出度りれども十はうはさうすれん次也は財用
 困窮して為りて飢餓するも多しなり家臣
 の衰微とありて目出度りし家國は奸民多し
 ありけり人刑戮もさうく外侮実義もよぬ
 失ふことありぬる實おん是と憂いて制とたて
 禁とさうけしをりてさう實もよたてりて
 りりて目出度りぬる家臣とたれりてさう
 こしあり

花本の花とつりてさうもさういふもさう枝と見え
 蒼とすのさういふもさういふもさう實教とさういふ

された一年二年の實教とさういふは果てしなく
 善とたのしむる實は花本とすさうなり
 めしたる家臣と裁之ぬるさういふもさう五年
 十年のさう候とさういふ苦勞なる故とたれり
 ぬる安富な計とさういふ家臣とさういふ
 保ちるふにさうあり

花本のりさりのけりさういふもさう實は
 あらす実極よりさういふもさういふも
 感は実もさういふもさういふもさういふも
 さう枯枝とたり出たりさういふもさういふも

末枝とてめん蒼とたるをとけりし日深を我深とし
 て根よちうい胡よりなるよんをといふて身木の
 いこまぬをうけし死とて死のあせぬをうま
 実のよくとゆるをうけし如きとてを枯とす
 こととていふるをうけし且よ枝とて死する
 蒼とていふりてとていふありとて一切の事
 とていふるをうけし枯木とてり多量の事
 もいふる

自然の気は木の根より十年に十年の功業より
 あつた祖先の用木の根に戦争の心をとてつるひて

順風の氣は後とんとて人々の感よとて木の
 朝よなまをてしより川をわたりて風と雲と
 雲のより数十年前を経ていひてあつた
 たる風義とやわわわわいすくくすくすり
 くとととれた強き人質とて柔らかなるよ
 流るる自然の勢をわし今太平の人民を鏡の
 せよと生長とて竹とて木の根とて木の根
 ありやうよとていふる理あることとていふ
 為鏡とてえとていふることとて不孝不孝とて父母
 のまらひとて忘れ家業とてすくくあつたこととす

なること思多きことなるも是即時と
 勢と成なる事よし其の極とて是等の
 治一安一富あり治一福一此世の民の善は
 爲す一治世の民の善はいふこと一扱又善を生む事
 世の善を生むこと一たす一明日を
 急物きたる故に今日は不善を生む事よく
 今日は善を生むこと一明日は不善をすきこと
 なること一思ふこと一今日も明日も然る事
 事とて身身の善も徳もあすも
 徳も九十歳を案の善命が保つて是善生の

極とてその家玉の政も又然り今日よく生活と後
 垂くは人をして十年の生活とせよ及んぬ
 といふ事ある一政の善く先づより大徳とて日
 つくと法とてぬ事や油のちるを慮しよ油を
 やうよを結とすこと一善くは人かみかみ夙夜不憚
 一人よ法とすまの門を始終よくとせよとて
 生活する人かみかみ又よれを結人を代りよ
 立てしとて善政の絶ぬやうみことなるに
 仁事の善く家玉の無義の事とていふこと
 生活よくとて善くは世に名はさるる善く

禹湯文武の聖王も子孫悪きて忘るれど
ありうごかし一政もすたれとて一事も然
たること也

乱世久しく換たて憂や治世たるごとく人
を憂つ然も賊用不足とて貪りつまりて人飢餓
も或るものも多かり太平久と死代り世界
一統ふ然用も備是して備候ふ候して善後長と
ま候ふ飢饉も或る者多しと人れをの武の良よ
を備りて苦む太平の武の良よ候りて苦しむり
多ふありたる武の救ひ悪む安しむり多ふ候り

武の救ひ悪むことしたく人蔬食之とて食つや
たる人の腹のつりたる人湯清食と塩菜も
儘有様多しと押れとて備りれとて美食海
も食つけたる人の腹のつりたる人つけ二葉の
料理も人とれも食するやとて思ふ人
人情の老も新も古語も味たるものも人を
さる一食す一飢するものも食候とて思ふ人
さるしとて乱とて多し弱と救ふ者も人治世
の多候人すし人絶し乱世の民の食よくして
疫疔も新たてぬ人たり治世の民の大便し

しぬるりともいふ活のきぬぬ病への病もしぬ
動るぬもより目病と見えもぬとも病周りもしぬの
違ひしちり

病後よりなりたる式に病への支配する役への留る
病り病より内傷お感も病もぬくとも病療治
する留るん中受同切もぬくの功志あるともぬり
ま門中より病への病への脱色容貌よんぬつちあて
ともくとも見察するとも也後とも病への病への
ちるぬるふんをつちあてぬも病を察するともぬり同と
いふ病のぬり次やとぬも同ひちぬくともぬり

切とつふん極ともぬり後と押してちぬりともぬ
え切と定るとぬくとも病への病への留るも
すゝともぬくとも病への病への留るもぬく
病への苦痛と我身の苦痛のぬくとも病への病への
病への病への病への病への病への病への病への病への
病への病への病への病への病への病への病への病への
病への病への病への病への病への病への病への病への
病への病への病への病への病への病への病への病への
病への病への病への病への病への病への病への病への
病への病への病への病への病への病への病への病への

療治油のなる醫者も人の病をたのむけりて
下手醫者も上手よかりし病を病者も下手よ
うれは憐れする人整然たることありし
る病者もいしを救う如くす良醫なる人ね
もいして業を困ひし如く下手醫者も人のけ
ぬものなりし人父母ありて其の子を救ふる役人
も助けし病者もするること仁志の甚きれ
りふ所しる事

よれ役人とす人の病切する醫者の病人の死生は
身よりして療治する病者もすることく人の
病をいしと良吏もいしなり醫者の病切する事
病とくいしけ賦税目録とすりても罪よき事
よしある病者も厭くすしを中をさるれ如く
る病者もいし病切する役人の馬も病者も推して
歩行もいし病切する民の病とく人苦者
大業もいし病切する風雨も早れ界もいし
を病のいし病切する病者もいし病切する
役人もいし病切する病者もいし病切する
よし病切する病切する病切する

乃痛病氣と申して強ひ裁許の延引すも
 その一々ぬい情を死後へありありあり
 賢おん人にとりて成る上の智と一殊あり
 意りぬいぬ急務とすあるをよき事とし
 意よする由しぬしぬ人の自然とを人の為むとし
 ぬいぬ人の賢飲残賊の悪吏あり有りあり
 ぬいぬ人の断食休むと肉と物とをいふ
 下平留まるとあるうち樂とあるやう形事
 とを念ぬぬやうよする人の苦を死ぬよおと
 るとらよ儉約とすといふもたのしむ

失ふると交へ争く後人の公正忠貞の良吏あり
 食ふ人ありありとて高岸のゆるぬる
 うらより食とひうていりまて色違ふぬ
 為うよきとす人の上手医者と此の真毛色の
 透ひよしをとにるよすとを思ふよする
 一のつとあり

○
 〇
 〇

花本はむま

○花本のそれと貴教すれは除き除きなきて虫と
 入りも成相しして捨さすぬつりぬちりり
 すれたんごんの根よちうひとや一殺いきるを
 ちりり色書の業えと願つを居うて枝葉も枯
 めもすんでとるりりり一木もりのまたん
 新とちりり根よんとはちりりしあやもち
 必用の盈虚家の産の貧乏も又然り根と忘
 れて枝葉の業とやと形ふりりあとおむと
 ちりり備よりのまたんぬりりゆりりり

花本の木の業えと願つ根株よんぬはらぬを
 ちりり家必のあとおり業書の業えと願
 へちりり業本とす一業人けりりりりりり
 美目ちりりりりりりりりりりりりりりりり
 美目ちりりりりりりりりりりりりりりりり
 面目ちりりりりりりりりりりりりりりりり
 組一りりりりりりりりりりりりりりりり
 ちりりりりりりりりりりりりりりりりりり
 ちりりりりりりりりりりりりりりりりりり
 ちりりりりりりりりりりりりりりりりりり
 ちりりりりりりりりりりりりりりりりりり

美目と辱りの実とすおのりりりの天かよ

知るが美目とていふと云ふ事と云ふ事
 天分といふ人此をよき生れたる程のものに生れ
 出るより劣る後をれくの身は分限定つて
 王侯貴人と生れ下人農工商賈と生れつき
 たる分限ありさねんけ分限のちりよと云ふ事
 たりと云ふ事分限のちりよと云ふ事
 ちりよ人の才賦學をよきたよと云ふ事
 又た死んて又此分限の内よと云ふ事
 けしき分限おのよと云ふ事
 又た死んて又此分限の内よと云ふ事

愛と死徳成つむ人の業と愛たうぬ徳とつむ
 人の辱しやう天分の自然と
 分限の内よと云ふ事死んでゐる中へ先部必れと
 生れぬと云ふ事下分武と云ふ事
 生れぬと云ふ事位よ安と云ふ事
 まれぬと云ふ事先自己の苦楽人次よと云ふ事
 下方武の苦楽と云ふ事
 下分武の苦楽と云ふ事
 下分の樂と云ふ事
 又たと云ふ事

まゝりてふ代万代をけえの愛く〜あきまんと
のこゝたひ〜こゝの天から〜意〜して
此上も死美目する〜こゝ〜此天分の美目
死美目と志の〜す此かよ美目と求め頼むのみ
時人美目と失ひ恥辱と振く〜也〜か死求りて
恥辱と振く〜と〜人た〜く〜金銀と
ちや〜とあ〜つ人美目と志の〜忘つた〜も
武の弟をいぬ〜も〜りて日は夜濁〜使する死
時人聖教の美と死と志の〜つ〜も〜入意後
の法と死と穢聖政の〜死と振く〜その恥

い法〜つ〜遊ま〜つ〜きの思の死後よ孫續とまぬ
ゆつ人美目と志の〜つ〜を武の弟子の
縁と志の〜つ〜使する死時人孫の美
〜死と志の〜つ〜も〜入意後のつ〜死と穢
聖政の〜死と振く〜も恥〜つ〜つ〜の遊ま
ゆつ人美目と志の〜つ〜八珍を納〜つ〜甘味と
好もゆ〜も〜武の稗の飯子とあ〜飢
死濁〜時人美目と志の〜つ〜死と穢
聖政の〜死と志の〜つ〜死と穢聖政の〜つ〜死と穢
〜死と志の〜つ〜死と穢聖政の〜つ〜死と穢

急の出入よめ禁欲の所中より其目成好むるふ
れる事とも或の秋子足成すして其母目成も
形々ぬ時人行禁の立派と云ふより其母も一入
意後の法より死と云ふ中政の如きと恨む新く
も死より一入の遺事ゆふに死は業之と教うて
辱致振くこれ天分な忘事して業辱成より遠く
ゆふ成る急の急成り煩さした事とも或の家庭の
肝端たるとく其の死後ハ垢つきた事とも或は
死後ハあたるとふ急の食糧ハ水ハ何れとも或の
食物ハとうとう急の死列ハ其苦一これ其は

飢饉の患者ハ人其急と受する人何と云錢甲何
切ら急りハ自必の或の情々もさす地ハ地必
の人まてとも一急と云ふこと其急と云ふ事
不まさ此とも急を自と云ふ一

天分と云ふより業辱と云遠く辱海一と云と
知ともて其用と其一辱ハ急を成りちすともて
財用と惜ます自の義成す人古今これ然り
急を又目ハいつと云ふ急一急内急の急ハ其
急ハ急持る急必ハ急急急急急急急急急急
急急急急急急急急急急急急急急急急急急急

内の人々悦び慕ひ奉りて何れも辱へざること
あり是榮辱の分と明しうは毎(わ)かあり
情(な)れどもことごとくかひて無益の費用
は困(こ)むるより愛ひるはこれ必(かな)らず人(ひと)は是
れを尊(た)ぶるべし

後(のち)に心(こゝろ)をこころし自然(じぜん)の勢(いきほ)はゆるぎ上
の好(この)むるより長(なが)下(くだ)令(たま)は侍(まへ)して好(この)むる上(うへ)の
婦(め)ひるより女(に)女(に)長(なが)下(くだ)禁(かぎ)は侍(まへ)して好(この)むる上(うへ)の婦(め)
歴然(れきぜん)より士(し)人(にん)万(よろ)石(い)石(い)なるなるの身(み)も是(こゝ)に不
天(あま)分(わ)くと毎(わ)かひりて榮辱(えいじゆく)を取(と)り遠(とほ)くはれども益(えき)の

う所(ところ)は俸禄(ほうろく)が費(たか)く次(つぎ)身分(身分)お慈(あはれ)の面(おもて)と保(たも)ちて
分のた(た)ぬる員(いん)弱(じやく)よむ(む)すた(た)く(く)とさぬ(ぬ)死(し)體(たい)と
用(もち)を忘(わす)れ(れ)る心(こゝろ)懸(か)り死(し)生(せい)は但(ただ)し甲(か)冑(ご)の修(しゆ)理(り)人(にん)
み合(あ)はして度(た)すれ(れ)ども年(とし)十(と)年(ねん)の相(あ)い合(あ)ひるは太(た)刀(とう)
刀(とう)の中(なか)身(み)したた(た)く(く)る人(ひと)子(こ)孫(そん)ま(ま)す(す)るも用(もち)おの害(がい)
形(かたち)に衣(い)被(ひ)器(き)用(もち)は立(た)流(りゅう)と好(この)むるその費(たか)はさ(さ)ら(ら)して
終(つひ)身(み)物(もの)好(この)むる止(と)ま(ま)す(す)る(る)妻(さい)子(こ)の奉(ほう)養(やう)は足(たり)る死(し)と
美(み)目(め)と(と)して奉(ほう)養(やう)の美(み)支(し)はさ(さ)ら(ら)ぬ(ぬ)恥(か)ず給(たま)は(は)す(す)る
下(くだ)女(に)の多(おほ)くは美(み)目(め)と(と)して生(せい)死(し)の場(ば)と(と)して足(たり)續(つづ)く
へ死(し)は(は)る(る)美(み)目(め)と(と)減(げん)省(しやう)し(し)仲(な)間(ま)小(こ)老(らう)の立(た)止(と)り(り)死(し)と

美目として日雇ひのものより機織致ることを
 知らず出入の町人より桑と振舞ふこと美目として
 知行の百姓に袖をすう成袖す元彼の垢つぬ
 と美目として具服者より延引としてわろ成袖す
 か履しよるものれども美目と袖との毎へぬ
 形ぬとしてわろとわろ敷もわろすつ生辛苦
 成さしてはあちるらんわろ窮鬼よ棄つれて
 身と致らるる是非も成元次やわろいぬらん片
 葉辱すともわろよ毎わろ成元用油足志差布
 へり農工商賈りよよ忠直のきりぬとしてよ

大く元扱の千と千入上の好次やよわろわろとる
 物をよる上のつらり葉辱すともわろわろよよわろとして
 美らるの役人よわろわろわろわろとして細細なる
 役毎のまわらまわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら
 角よも鹿角のたよとよとして成用の差費と省と
 美と致りよわろわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら
 美としてわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら

七の病とわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら
 うわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら
 わらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら

の人も四年目少くは痛すし——とて——とて
用て七年より七年目より治——病を治し
醫者の治療のともぬよむる病人の大群く不
善を生じ止ぬ人よ多きもの也

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

對系侯同書

以別紙中上の表を裏に紙を折る飛半字形に不
又之も前後はりの重複多し條々次第にお別
字に不致しむる意に改書はりて字入清後
此を以て精神弱く其成度をもお徳也——
此を以て紙に折るは其意に記はるべき
是より上りし事し行ふべき事

一 清公の學問所ヲ此處立す此處ハ此年迄

清先祖振よりして俗ヲ失ひ不中事人安堵仕ら
此處度しり此極を一人と利口費此の極度

中へあつて人々の心をなやませしむるは昔風質実の如
くして徳家に勝りしやうの如くしてなやませしむるは
年々と悲化次第に心を離れて去る福の如くお成り
此改革の如くお成りなすといふ事と毒の如くお成り
學問の如くお成りなすといふ事と此徳の如くお成り
學問と名はする人々我々の事とこの如くお成り
上の如く徳と申すは心持の如くお成りなすといふ事
と心持の如くお成りなすといふ事と此徳の如くお成り
たゆむる如くお成りなすといふ事と此徳の如くお成り
浮の虚飾の如くお成りなすといふ事と此徳の如くお成り

學問の如くお成りなすといふ事と此徳の如くお成り
義理の如くお成りなすといふ事と此徳の如くお成り
中へあつて人々の心をなやませしむるは昔風質実の如
くして徳家に勝りしやうの如くしてなやませしむるは
年々と悲化次第に心を離れて去る福の如くお成り
此改革の如くお成りなすといふ事と毒の如くお成り
學問の如くお成りなすといふ事と此徳の如くお成り
學問と名はする人々我々の事とこの如くお成り
上の如く徳と申すは心持の如くお成りなすといふ事
と心持の如くお成りなすといふ事と此徳の如くお成り
たゆむる如くお成りなすといふ事と此徳の如くお成り
浮の虚飾の如くお成りなすといふ事と此徳の如くお成り

此處の徳は少くも先づ師とお成り人けあらざる事多
 才一に多し扱人と交へるも百人の匠人つれい
 り未もその人らに多し交りあはるる事多し
 三子の中子中子人し扱美才子多し人し
 匠師の徳も殊矣し盡つて流るお見ぬ中し匠
 聖人の徳化しし行しも善ん多しお成り人
 小ハ小しししし世界ノ用ニ立ツ人并しお成り人
 の徳ニテモ此つれ交へ立テラレる事多し
 うし多し匠と併し人ら善んにお成り人し目し
 一師長の人と交へる事多し徳はトモアししし

此處の徳は少くも先づ師とお成り人けあらざる事多
 才一に多し扱人と交へるも百人の匠人つれい
 り未もその人らに多し交りあはるる事多し
 三子の中子中子人し扱美才子多し人し
 匠師の徳も殊矣し盡つて流るお見ぬ中し匠
 聖人の徳化しし行しも善ん多しお成り人
 小ハ小しししし世界ノ用ニ立ツ人并しお成り人
 の徳ニテモ此つれ交へ立テラレる事多し
 うし多し匠と併し人ら善んにお成り人し目し
 一師長の人と交へる事多し徳はトモアししし

少厚層の内の怒りもさうして流し取投の能き
 難き事なるものカ学問と致し理義ヲ毎寸の
 人の所為とせしけ所ヲ毎へ極む致へず師長
 の才一と事存の有致無致と此解なくし事なる
 一師長とすべしとて我計是非よく善きもの
 不致成り致し人業世の所とすも成る不致極
 致見ずる但一人と致えその人となし善き
 致度人とたし致すり不致極なるもの致度
 事と事存の致めものも悪純なるものも此家中の
 人となし致すり不致め人の致めものも此用
 三悪純



悪純又致へ戒て刑辟ヲ又致し事とすも
 一人懐の目と悦ひ名回ヲ致し事とすも
 此の事と所と勉強して目美の端なき極し
 事人の師長の致し事我好む所ヲ致し加へ
 悪の所ヲ劇に相し事極し事人の極し事
 の任する事と事と貴し事返す事と事と人
 と事と人職と事と事と事と事と事と事と
 事と事と事として行率不致合事と事と事
 事と事と事と事と事と事と事と事と事と
 一時に流し取り所施に宜あり先事一と事と事

此世の世に於て人の名を卑くせしむるは後漢キ抄の如
 味もよす今日我に勝り我に劣る人ヲわけ
 用ユる人ハ世に於て中の人ハ人の名を卑く分限
 之ト定リアリテ我に劣る人ハ人の名を卑く分限
 トテモカクテモ我に劣る人ハ人の名を卑く分限
 之チユルハ分限ヲ起しユルも我に劣る人ハ人の名を卑く分限
 之ト下ニ居ル人ハ人の名を卑く分限ヲ起しユルも我に劣る人ハ人の名を卑く分限
 大まにあり士ハ士ニテ我に劣る人ハ人の名を卑く分限
 大まに奉用仕ルハ大まの所作ヲ致し士ニ劣る人ハ人の名を卑く分限
 此用ハ成ル人ハ士ニテ生涯とて居る人ハ人の名を卑く分限

一杯忠実と云ふ事ハ人の名を卑く分限
 亦ある所ハ人の名を卑く分限
 ソレハ人の名を卑く分限
 亦ある所ハ人の名を卑く分限

一 學子彼等生々集る四書五經と素論ニテ文字別点
 正しく是れを次々と講釈と承りソレハ義理ヲ
 毎へ知リテチト究む身行いと智燈を致る事
 亦持の老ヲ此獲メて是れを詩文ヲ知りセ
 ヲト云ふ人ハ其の辭義ヲシララシク作り是れを

此種教の系ナラス切にりた今之治礼興慶人
 情ノ厚薄とも無へき遊教の位上子ハ秀才
 下子ハ名才とも是の如しサノ必政ノ利害ハ無リ
 不中ハ但一辭とヤその中極も人ノと感一
 少の妙あるものこそ是れ也善良之ハ法中極
 少也度よりハ極之極之妄語尚産之極也
 心ハヤ極も利益ハ少く損害ハ多キことハ此ハ
 損害と中ハ驕教自負のハラ也詩ヲ作り文ヲ書キ
 ねむ人ハ人ノとも無く極之下一ハ為まハ人ノ
 結文ヲホメソシリハのりガ面白クお成れ時ハ人の徳ヲ

損一不年害ヲ生シヤその名存海山と云ハ詩文ハ
 名好ラハ人ハ出ス云々是ハ豪傑不教多キものよ
 心ノ存する所也情ヲ取失ハ中極之ヤ取之也心
 一云と云心ノ存得教一也のラ云云也所ハ以ハ
 此種之教度よりハ生シ今世の分限ヲ忘レ直ニ
 心ハ一ハ人のヤ一也なりたハ一ハ人ノ万端ノ害
 ラ生一ヤハ書ヲよりヤ一也人ノ世ニ立テ死スルニ

吾輩に渡りて一奉文ハ紙一枚ニ幾おも記し有るハ
ソレヲ全ク身ニ行ハシムニ出シテハ賢人君子ニ如ク
其極トナシキルコトニ如クハ一ツツ亮モツツ
智ハ云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
入テハ孝出テハ悌ト云々云々云々云々云々云々
是ヲ云々云々云々云々云々云々云々云々云々
及云々云々云々云々云々云々云々云々云々
中ト云々云々云々云々云々云々云々云々云々
遠シキ事ト云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

中ノ度ガ師長ノ職分ニ由ル也

一身ニ分限の有らざるヲ毎ヘサセズヤル如ク人々ノ
人欲ニテ人ヨリハ高クあり人下リハ低クニナリ度
ト云々云々云々云々云々云々云々云々云々
學問ノ害黷及終ニハ身ヲ失ハシ生ト云々云々
有らざるヲ了所謂論語ト云々云々云々云々
形ノ如クハ云々云々云々云々云々云々云々
中ノ先人ニ法セラレ及セラレズニテハ不肖ト云々
信受セラレ如ク悦服ト云々云々云々云々
自然ニ在ル人と悦服おぬるハ一ニ云々容貌

ヲ懐き事しるひハ温系敦厚ハ詩ノヲ之ヘナリト
有るハ詩を作リヤ人ハけま又と能くぬる事しるひ
ハ身ハけ場より詩ハぬきも人ハ物モノハとさく
温和ニナルベキ一ニ身ハ我懐我執ツヨクナリハ詩
のワキ及ヘリタル人ハ仲ハ詩ヲ學ぶも文と作ルモ
君子ノ所作ニ身ハ君子ハイカナル人ヲ云フ少人ハ
如何なる人と云フトヤ新ヲ毎ヘヤ度りハニ在リ
人のようニある様ハお〜〜とぬやうみハ古聖賢
一名云とヤ詩一並れゆるモ理義ヲと人毎ハ知リ
ゆる事ハ及そ毎ハニ必致一と人ハぬる事ハ

モ理義ヲ毎ヘと人ハ出物ヲよモ師の教ニ在ルハ
出来ぬの事ハ〜〜トモ出来又ハ書物とト海す
師の教ニ在ルより生ハたる不肖少人ハ知し君子
ノ多クある様ハ少人のす〜とさ〜とある様ハ
君上ノ教ハ重なり大勢人ヲ集メゆるトモズニスリ
アゲミガキ上度ハ教ヲ向テ取立テ立極たる事ハ
以テ身ハたぬ事ハ學問所ヲ取リヤ及ハ極下段モ
扱〜と重キ職分ハ取ル〜と心腹ニ付モ忘レ
中間段ハ師長のツトメニハ忠長ハ出テ不肖ハ
不忠志ノ出ヌヤウニ孝子ハ出ストモ不孝もその〜とぬ

為しこころゆるる二子三年宛変化しつて度
事しこころゆる

一 威表ハ物ノ常ニ付テ其ナレハトテ石年ハ二る事
一 概ニテハ立ヌー古今歴然ニ付テ併ニ取扱方
十ニテガ女年ニ付テ石年ニ付テ人持らして
そのとお見えし取扱方ニ付テ人火のともゆる概
ゆるたビツヨリト水ヲカケタレヤ人お成り事不
之業ヲハシメル時ハまづ表へたる時ハ何概ニ
但しびつとより人々を概ニ付テ完初考
し度る事ニ付テ傍ても表進ひラキテ甲の統ラ

シメゆるの古より名人の所作ニ付テ 名正に如
其為立事ハ他化次才ニ付テ届キ此對内之人民孝悌
力田ノ民モ次才ニ多く母其学彼も次才ニ相与仕リ
學子同出精ノ人も多くお成りノ事上概も其目
出度ハ成ニ事ナリ併ニツラニお考之申ルゆる
寂子品有の取扱方ハ上も多ク中分ニ成とも
何年世ノ子孫の取上も多ク有る度ノ事ナリ
此學同ハ概ニお成りノ人ニ付テ謹日ヲ多ク何概
人ノ納リル概ニ其取度ハ海山ニ付テ概不足ニ付テ
一杯ニお成り概ニ仕度ハ教邦ノ事ハ倫堂と造立仕

此其能く子廣く致経るゆゆは神を講う用キ
小目入つ流麻下下としてお出れ月一向子や毎として
納りうの子を授老中へ之指寄して堂のお後、爰
物うお致りるる昇と云々貴人の堂上儀老の堂下
居並ひ申りる講う終り申り老長執政を承悦だん
急々又く堂う作り足一了申評議を申し申り時
思や申り候一少人あつりて此座ゆゆは始終ハケ概ハ
無き申り必定こつ在り方先智増作ハ此止て下
貴賤の席と定メ講日と云々上云ハ一月廿六度
中分ハ此度下分ハ二度とお定メ申度ハ毎講日

出席ハ初五時ヲ以て定一五時入る學館の門と
候一たとい大長を日として門より御り少候は
つら下れお出れ申り七ハる人少人位ハ納りて申り候
表へゆる凡言候の表を庭へ子たの集りて申り候
此の如く申り候定メ下度と申り候一ゆゆ申り候
るりとしてお止し申り候仍きり候と申り候一候ハ有る
近年督学も三代目人々の存無も有る候一候教も
爲くお出れ候を規則ハ私の立テ並り候と申り候
人とお出れ候同様の儀候と申り候二度之稱業も急度
有る上々名代ハ爵位ハ老長大段と申り候お執り申り

先ツテ極まるもの此座に字数を海くちとして作り
増しくゆるみ限りもなきくちりとして有るを
一此字同所ラ此之ヲ延擡り奉るに此玉の人俗所眞実ヲ
失ひ不中浮虚なるぬるりて中不折要の此座に
大まかちまらるるラちり士ノ職ヲちり上下其後
一月に我玉より此玉のやきくとなれぬに致度り此玉
此玉への吹腫ハ此玉の致さく此玉の罪民を此玉に
此玉のけつ無上の此玉とまなれぬるに此玉に八用此玉
此玉の八用大く一セ人此玉の十万余く十万余十
五万余の十五万此玉の上のちり此玉致るに此玉に

此座に浮虚く無く極実のち多き極く致へ此玉
中不度りも所ハ此玉に致へ方學生の字いりて
有るく此玉に學生字ノ詩文も出精能此玉に傳兄
此玉先目此玉が此玉に悦中此玉此玉此玉此玉
此玉の此玉此玉の字此玉極く此玉此玉一此玉
此玉此玉此玉の詩文此玉に持此玉此玉此玉此玉
此玉此玉一此玉の評ヲ此玉此玉此玉此玉此玉
此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉
此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉
此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉
此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉此玉

人よホスニ璞ヲ以テセスト莫ヤル玉極上ニ感んたえぬ
 極ニテモ非論ハ多クモ拙ニテモ良し、いましく作り習ひの結文
 大部多ク子へもホシキ度と申ハ、其子浮靡なるんより
 起リ申ルハ、浮虚の人情也、ね極ノ致度ハ先ツ内編
 として、ぬと懸一、ゆると上、申ハ心ヲ真心実情ニ在リ
 要ス、三人存ル、より、各々、申ハ申ハ、申ハ

一大部出、改、リ、申ケ、ト、申、ハ、人、々、実、好、ト、志、一、虚、飾、ヲ、如、シ
 極、ニ、致、ヘ、テ、度、ハ、報、上、之、心、ハ、実、好、ト、申、出、テ、競、進、ノ、人、ハ、虚、飾
 より、性、申、ル、人、々、分、限、ヲ、每、ヘ、存、リ、私、安、シ、申、ハ、申、ハ、同
 之、所、ゆ、エ、テ、申、ハ、申、ハ、同、心、ハ、致、の、人、物、ハ、志、上、之、心、極、力、

有、之、リ、シ、テ、之、之、取、極、有、之、リ、シ、テ、之、之、也、
 此、の、用、極、ハ、學、用、ヲ、極、々、申、ハ、極、上、ニ、熱、阿、進、退、時、宜、ノ、
 此、度、ハ、極、上、ノ、唯、々、人、々、分、限、ヲ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、
 此、要、ハ、誠、ト、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、
 此、也、又、實、我、等、ハ、心、ハ、者、破、リ、研、ト、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、
 の、習、ウ、又、生、得、ト、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、
 先、心、同、モ、存、ト、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、
 一月、ニ、お、執、筆、お、恭、敬、と、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、
 申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、申、ハ、
 初、申、上、之、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

うまやうカタカナヤラ増も各々を扱ふ不致く之極
多ふ事必入るおタラハカリカタキを義と義人の徳と
中へ取りもお付し不中よりとは慚愧するところにて
も所人子系象 清忠忠一ツとくもは取用お成
しよりハ以汲量と極とト一極の極は仕度とありて
清心ゆゆもつ極の上もとてキ不中ゆゆも先
大畧と新ラ書紀一書入 清忠の事と書入
此紙強うト度と顔々の上

嚶鳴館遺草卷第六

是先師以寛政丁巳之春所賜余之手
書事狀詳悉盖儼然一編米澤紀行其
書到之初柳川致仕大夫今村子共適
訪余廬余出示之子共觀而大喜感称
不已遂請數日之借袖歸子共好善盖
寫而傳之于人厥後寫之相承數年間
我四隣侯國之讀書好道者往之皆傳
之云先師没本今十有七年而此書則

二十有一年嗚乎舊矣先師賜書余家
甚多而此牘尤深感人謹裝以貽之于
子孫

文化十四年冬十一月樺公禮拜

[Faded bleed-through text from the reverse side]

新年恭祝... 令女孩笑出... 山彼中... 一去年...

... 諸侯家... 貴邦... 皇法...

此方承之... 專に... 後... 一... 後への... 不... 有... 帝... 一... 下... 途... 中...

澄... 兩... 人... 一... 躍... 之... 以... 聖... 系...

依之未得候に徳澤に申すに極子に致感心なり目振之
 旅に九月五日南境板谷築に至り申すに授之督子徳澤
督子の神保行簡申すに申出に命方申すに申す候事人色
 多く申すに申すに申すに日頃下り府城より三里大津
 申すに申すに申すに候秋安部近之沙汰申すに申すに
 八心色に相違申すに申すに申すに申すに南郊一里云々丁と
 府城に距り申すに申すに申すに候の儀申し候に申すに申すに丁
 橋下り申すに申すに申すに門院申すに申すに申すに候に申すに
 俯伏候路の中心に立テ申すに申すに申すに申すに申すに
 地を申すに申すに申すに候の態度申すに申すに申すに申すに

答洋に有し極子候事色非是申すに申すに洋に申すに申すに
 何と云ふと云ふに申すに申すに申すに申すに申すに申すに
 満面先生申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに
 外門より中門迄は指作申すに申すに申すに申すに申すに
 申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに
 申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに
 申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに
 階上り堂板に座し俯伏して申すに申すに申すに申すに申すに
 例申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに
 申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに
 申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに

お海に水を位戸六郎兵衛九郎改名の序侯の命と目録
是と郊近勿論整儀の礼容保切に扱後行も後も亦
徳公子より名代の使も皆礼扱して是と桑名大守侯の
其丹泉に湯舟附の家を二人使も其差出り今日
近傍の村を多々少田畔に伏して俄に親しく生か呼の
奇計も皆々後後位は奇しく成るゆへ侯の
徳氏に感戴之所は是と相親しくは是と思ふるも
豈可不位乎

一 此安内中より一は侯敷が在り川邊尾をて府城に入り
中より城を度満達を侯の儀用と扱親しく是と思ふる也

中より是又信條之奇り不乃年ハ旅彼ハ之ハ九月を侯の
隠彼より三丁計も有るハ奥山長ゆり中より近江家作ら
致也一は是も子侯一家も酒ハヤハ宅を成り人
預出る思を遠中一は旅彼に作身交を殊猪に是
右屋敷の候一旅彼に定ハ思を表年ハ水取と好ハ
ハ候多岐及ハ新ハ右庭中ハ泉他ハは築流ハ流儀中ハ
ととちろくハ他ハ口ハ多岐右庭中ハ下り致道遠中ハ
只ハ度ハ之ハ奇ハ

一 彼に玉り中より一は是中系其家所候兵庫以下ハ其有目
皆ハ礼儀厳然待迎ハハと應方其所ハ不至ハ徳公儀より是

脱く彼を不の門にせし候は申はさ方一申はしき
 一 聖抄改る候より彼を不の事方益に法一申は月四時
 臣彼へ出ると門に元次きと名ぬ人お侍と云旅彼ヲ費一
 申はお侍ヲ報一申はと名ぬ門に出入り人附く用へぬ人
 去候或は去り出迎ひ取次下座侍申は入座おぬ候
 麻下外と云ふと名ぬ出迎ふ候申は自身お守有之候
 奥座之間へ案内して実主ヲお侍例く對座して先
 坐位終り及ひまより料理出ると名ぬ所不ぬ、及らぬ自
 身お侍候と名ぬ杯ヲおと申はと名ぬ有日尋乞八と云
 飲宴まより左にお退ケ精密之候及申は先と

急情候向有之候及今日八方之申と云七比之致
 退出送迎如き痛入りのたて、海彼候也に彼を仍凡
 つつ蒲席一ツ小杯一ツお箸お命、お茶を、候方候と云
 思し申は間け凡よりけ席に座一難く是れ必く席新し
 凡ら退く候に候と名ぬ座候との紙杯は通年小杯ヲ
 此好この坐是より候と名ぬ用候凡ら候候に付ひ申
 申は又く申は付は蒲席は必く座と名ぬ新し候に織セ
 候と名ぬ是れ候と云無所不申、又席に候及申は向
 是長を御々皆く日く、出候記候申は先生より出出
 候候に候と名ぬ用け候、是長を、申は申は申は長

つ統_ニた_テ後_ハ後_ニ元_ハ大_ニ老_ク彦_ノ高_ニ統_シ子_ハ凡_ノ日_ハ統_シ是_レ日
 此_方より日限_ラト_シ此_請一_年之_儀を内_ニ此_長と
 あり安_ラ固_シ固_シ夫_年の_如ク_テ法_一之_未才_子
 之_後に_ハ婦_人を_擧げ_テ受_取候_上の_儀作_後之_通り
 和_電示_ス而_ハ換_取返_出せ_りの_如ク_テ及_テレ_ル所_望皆_ニ申_付候_事
 依_テ之_違留_申此_長及_テ其_餘之_儀大_長より_テ統_ニ目_ニ才_未
 同_ク請_ケレ_ル計_トシ_思是_レハ_一向_テ才_未を_是前_ニ欣_當申_付
 此_長一_次免_布一_とあり_歎テ_レ一_ヤレ_ル大_老彦_彦
 の_如ク_モ每_日に_精力_を盡_竭大_老彦_彦七_千七_段ヲ_盡シ_テ
 此_統に_レ此_長を_擧げ_テ此_子と_シ子_後行_者
此_長の_弟
 後_行者_也
 此_統後_之長_也
 是_レ也_也

本_向自_是の_事未_也之_如ク_テ及_テ免_布あり_統是_レ也_也
 一_中條_を未_也竹_俣兵_房佐_六郎_之未_也之_如ク_テ一日_ニ二_度に
 あり_レレ_ト度_を未_也日_也未_也之_如ク_テ四_九ツ_と欣_當申_付
 子_らノ_身之_儀解_新旧_お知_ス統_有自_法是_日未_也未_也向
 是_レ又_日の_事未_也

一_學館_へ入_る者_之數_ヲ日_毎之_如ク_テ相_得統_{學生}と_欣當_申付_候
 致_一月_ニ六_日二_七日_終日_終出_居あり_{大學}ヲ_講一_日
 後_の詩_文又_ハ等_をク_テ統_一ヤ_レル_所學_生者_數十_人
 圍_繞シ_テ統_ヤレ_ル所_家之_如ク_テ出_居白_講談
 四百_人計_數町_寺の_如ク_テ出_居レ_ル者_數百_餘人_也

限一ヤル勿海例之通思意を位キヤルキ學破へ出序
ノ日ハ志長統大臣も不殘出序學生何にも上達之業
風ラ城之クシク執子ヤルルと抑々手交女子公上田兼利
苗生結學生と交款日ノ夜ヤルハ後傳り長くお成身
略一ヤル傳ハ出惠像ノヨク事ヤ

一 志侯ニシテ毎日誓言ヨリ事上仕次ハ子キヨク事ヤ
四ツ色ニ海飯多ク時々志キも交リ何是候ニ志ヨク及ヤル
老侯初四時ヨリ誓言ヨリ大志侯伺ハ一日も志ヨ
テ事ヤ方ヤ程有クハ日々之伺ハ陰晴風雨疾風
迅雷變ヨリ事ヤ事ヤノ抑々ノ玉孝ニ性ヤ武感戴

先ツ是ノ事一ノ志極ニシテ大志侯ハ一日も志侯ト不
志見ル事ヤ事ヤノ仍々之志ヨリ志ヨリ孝ハ感被多ク
志侯志ニテハ日々孝經ニ講ヤル時キ之有ヨリ院不
及ヤル事ヤ事ヤ日々事ヤ事ヤ講ヤル中感ハ之儀ヤ
事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ
志侯志中ニテ成育有クハ記居勤静ニシテ事ヤ
老侯の性度ヲ事ヤ有クハ祖父振ヨリ外ニ難ク人ハ
事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ
徒忘ク容色一ツも事ヤ事ヤ事ヤ祖父振同執ニシテ事ヤ
威儀容度儼然事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ事ヤ

勿論天性より及べぬ事九段より内には存出(合)成(成)は
此を素より来りて候の趣にても是等誠なるも仍之
略し申す

一 領内より其より不逞者其孝悌力因は成り有るは
安然として慰勞スルこと申すは條の上田某例に依り
申す計に申すは生育の七條も好重き今ハ一武も子育
志無きは不思儀と申すは御府より市谷にては申すは
此は是計にては是の趣より大功哉と申すは稱美致す
志三郎も悔嫉愛存し申すこと悦ばる
一 泉氏之婦病没後子も申すは使て其告る事是はとて

寛政己酉八月末より申すは永決いしは申すは申すは
多段の併を候は申すは以下一統之趣長に申すは
哀と涙に申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは申すは
別と竹保夜戸毎に申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは申すは
色忌明り強を申すは申すは申すは申すは申すは申すは
度く迷熱申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは申すは
一 藩中より怒ラ生し申すは申すは申すは申すは申すは

ふ致の情のえ拙作の

一 三宅と妙然有司之輯睦とより為事不及中は是を
 致すの毛如重キヤ子と存の茲たま劇職中一文雅ヲ
 不慮面白くお見へヤ竹尖方編中條も俗人のあつた
 者も面白く映合ヤ神保堂向ラ上ヤ智學用人ヲ
 為事致疾も多クけ人の交ヤ山尾紀多事文職ヲ轉
 一 那事のにおぬる未降も人憂鬱之職も多クは既リ
 所々人武難ぬ扱結出一般にふけ人那事のにおぬる
 志門とふ子繩と入用と多ク民も多和キヤ人ヲ任用
 により不堪感んる

一 二十二日逗留雪も降りヤ月是非あり十月廿八日未降ヲ
 費ヤヤ中日を候駿河も夜夜を更ハ當主の席と云又
 羽志堂と云ふ郊送之儀漸儼然新旧お急ツ送リ
 中より一里餘南郊羽志堂と別レヤ候ヲ妙一統
 之為後堂と云ふも成神保の送りも役人ヲ引連念と云
 板谷雲を送リヤ別離の愁也悲像も成生座と云
 再遊の冬々地山川遠處銷魂之候月日と云十月九日
 未降也ヤ中橋田より近役千住と在出ツ崖中彼へたま
 中座子あ人待居ヤ丁寧不及ヤ候も生座の仕舞
 旅の供也も本格と通りヤ馬も少ヤ候も俗吏の

慈いとうとうと

一 九日辰へり油意と月望打市谷第之期一
 中々志上ル子也
 奥座へは出ルと定て、魁芳兼洋物屋、お成二時計傭ラ
 其後、ゆると、之と、夫方、外、退、出、之、時、結、意、居、用、座、へ、呼、出、一
 又、之、目、振、で、書、物、読、り、お、成、八、ッ、色、第、と、出、て、近、色、友、長
 也、初、之、一、言、致、油、宅、門、人、群、集、八、比、ま、と、傭、中、の、望、三
 十日、於、山、田、平、次、在、新、令、日、八、尚、主、出、礼、市、谷、へ、志、上、之、序
 座、之、後、へ、志、名、長、と、中、彼、月、大、キ、之、取、也、と、彼、是、掃、除、中
 付、中、儀、衛、儀、然、兼、洋、産、麻、立、志、名、智、新、側、八、麻、上、下
 ド、ロ、く、と、此、座、之、座、之、奥、ノ、小、座、安、へ、精、一、中、之、意、座

小人就着、友、志、客、座、に、就、キ、初、之、と、例、之、恭、遜、辞、讓、時、ヲ
 移、一、志、之、あり、中、庶、士、次、田、高、仲、却、与、先、生、ヲ、方、一
 之、の、中、之、身、之、中、高、身、漸、對、身、へ、出、り、有、之、小、以、度
 先、生、ヲ、志、出、へ、招、待、之、出、礼、市、谷、へ、令、日、中、上、之、隨、志、出、
 出、礼、中、上、之、儀、釋、謝、及、覆、丁、寧、痛、入、銀、綿、端、匹、酒
 膏、表、座、安、へ、備、へ、座、滿、中、之、内、家、之、銀、工、へ、中、一、付、刀
 指、指、二、口、新、之、志、為、珍、之、志、持、志、之、身、之、目、録、ハ、兼、洋、候
 出、自、身、之、志、取、後、ハ、是、ハ、先、例、紙、産、廣、町、へ、出、之、礼、之、意、り、
 之、身、之、妻、子、娘、志、志、出、然、魁、芳、各、物、有、之、小、執、長
 石、出、之、目、録、ヲ、中、之、隨、從、由、生、上、田、之、石、出、一、謝、釋、之、之、由

物扱の事候も有之候何れ候も不申取扱一ツ出居有之候
 意ラ例之通をとお察候事より志願候事と申上之御座
 有之候御座有之候事候も御座候事と申上之御座候事
 入リ申上之御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 御門の内ニキミノホトリニテ辨無理ニ清しゆと上與有之候
 礼へ受与事候事候も御座候事と申上之御座候事
 桜田へ参り申上之御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 中津里と稱候事候も御座候事と申上之御座候事
 下りの家来事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 何れも申上之御座候事候も御座候事と申上之御座候事

備後の子を及申上之御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 淡州少左候事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 此後申上之御座候事候も御座候事と申上之御座候事

一 上田叢州ニ参入は合志と申上之御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 申上之御座候事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 料理申上之御座候事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 惣後申上之御座候事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 申上之御座候事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 申上之御座候事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 申上之御座候事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 申上之御座候事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 申上之御座候事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事
 申上之御座候事候も御座候事候も御座候事と申上之御座候事

三

け度のおりおぼく次子元孫と産すく存せよと云は
 りつ了るる教く風邪十七日平外ソリヤコソ旅疲ると
 醫師と云ふことしつりぬる行く若く解熱ソリ漸く
 快復飲食を復しけし人の全人おぼく始もえお覺せし
 けり出仕結方也勅も大方明日切りに海にけり今日
 此書ヲ徳メヤル所あるて下り今直く出府も無んえ
 又の直くもおぼく拙く至んは是れ熱へヤル世候と
 恐ん哉と妻子女と云くヤリ言ふ面涙代へテけ書
 徳メヤル書續てて致く存せよと云レモ面赤是下計

一 アアバスムーと俗ニテヤリをく廣く化んハ此書用
 此に徳ハ此書子次書に云は

一 一多と云ふことしつりぬる行く若く解熱ソリ漸く
 快復飲食を復しけし人の全人おぼく始もえお覺せし
 けり出仕結方也勅も大方明日切りに海にけり今日
 此書ヲ徳メヤル所あるて下り今直く出府も無んえ
 又の直くもおぼく拙く至んは是れ熱へヤル世候と
 恐ん哉と妻子女と云くヤリ言ふ面涙代へテけ書
 徳メヤル書續てて致く存せよと云レモ面赤是下計
 一 是下のおりとおぼく次子元孫と産すく存せよと云は
 りつ了るる教く風邪十七日平外ソリヤコソ旅疲ると
 醫師と云ふことしつりぬる行く若く解熱ソリ漸く
 快復飲食を復しけし人の全人おぼく始もえお覺せし
 けり出仕結方也勅も大方明日切りに海にけり今日
 此書ヲ徳メヤル所あるて下り今直く出府も無んえ
 又の直くもおぼく拙く至んは是れ熱へヤル世候と
 恐ん哉と妻子女と云くヤリ言ふ面涙代へテけ書
 徳メヤル書續てて致く存せよと云レモ面赤是下計

後復之州... 納不...

正月...

紀法民

世儀... 贊...

格...

... 保... 守... 守... 守...

[Faint bleed-through text from the reverse side]

先師平洲先生國牘跋

平洲先生之學之德之大世尚有知與
不知我侯屈致之千里者三區、唯恐
失其禮且敝邑之事一無可觀者固矣
而騁虛聲乎大方君子慚愧何勝雖然
先生之親我侯亦豈常尋行路之人耶
經年所者二十餘矣矣哉先生曾有云
樺世儀助吾者也信哉言也一卷之國

讀執而讀之一字一淚使人慨焉憶往日先生而有知不亦咲泣九閔之上耶文化十五戊寅清明前一日七十六翁神行簡拜

此乃平洲先生遺書輯錄其書之及以
平洲先生遺書輯錄其書之及以
平洲先生遺書輯錄其書之及以

夫其書且姓邑之草一無可歸者固矣

先君子平洲先生國字遺書存篋笥者若干卷所應于諸侯及諸子需者十居七八焉辭世已久矣人或借本間有散逸余每憂之會舊門生來集語次及之僉曰隻字拱璧不可不重假令借者愛護亦恐轉寫之誤貽瑕於夫子不可知也私刊而眎之何如余甚然之於是

斯舉匪敢公諸世也

天保乙未歲仲春

男門德昌謹識



門人西條上田節書

庚子年平所矣



